

問いの共有が創る世界へ、共に生きるために、ウナギの問いかけに応える。

ぼくはウナギです。

毎年土用の丑の日が近づいて来ると、人間たちはぼくたちウナギの話題できりもちきりですね。ぼくたちに多くの人たちが関心を持ってくれることはありがたいのですが、ぼくたちのことを、本当に大切に思ってくれているのかと疑問に思うことがあります。

人間たちは、ぼくたちが減っているという心配しているようですが、実は、美味しい蒲焼や鰻重を食べられなくなるのを、心配しているだけではないのかと。

ぼくたちが、なぜそんなふうに思うかというと、最近ある話題で人間たちが盛り上がっているからです。

その話題とは、ウナギの完全養殖の実現が近いというものです。ぼくたちは、ちょっと不安です。人間たちが、ぼくたちを思い通りに増やそうとして、川や湖や海から切り離れた人工的な空間で、一生を送れるようにする技術の開発をしているからです。人間たちは、その実現を夢見ているそうですが、ぼくたちはみなさんにもっと別のことも考えてもらいたいです。

そもそも、ウナギの完全養殖が実現したら、ぼくたちは復活するのでしょうか。

ベンヤミンというドイツの哲学者は、「技術は人間と自然の関係を支配する」と言ったそうです。完全養殖という技術も、人間と自然の関係を支配するかもしれません。絶滅しそうだから、人工的なところで保護して増やそうということを、ほかの生き物たちにも行っていませんか。でも、人間は、そのような方法や技術に頼り過ぎて、自然とのつながりを失ってきたのだと思います。深刻さを増す地球環境問題も、人間が自然とのつながりを無視してきた結果、起きたではありませんか。

みなさんは、本当にぼくたちウナギと一緒に暮らしていきたいのですか。ぼくたち自然の生き物たちと暮らしていくために、自分たちの生き方を変える気はあるのですかと、問いたいです。

ぼくたちは、皆さんに変わってもらいたいです。だから、ぼくたちウナギが人間たちに投げかけている問いに、本気で応えてもらいたいです。

ぼくたちが、投げかけているのは、みなさんにとってウナギとは何かという問いです。

みなさんは、何か難しい問題が起きても、新しい技術を開発すれば解決できると思い込んでいませんか。だから、「あなたにとってウナギとは何か」という問いかけに、気づけないのではありませんか。

「何か」という問いを人間たちに投げかけているのは、ぼくたちウナギだけではありません。人間の活動によって、地球全体で生物多様性が失われつつある今、様々な生き物たちが人間に、生き物とは何か、生き物たちと共に生きる意味は何かという、重い問いを投げかけています。

みなさんは、桃太郎の昔話を知っているでしょう。ほかの昔話でもそうですが、昔の人たちは動物たちと話をしたり相談をしたりしていませんか。たとえば、昔の人たちは、米作りをするときにも、周りで暮らす動物や植物から、どの時期にどんな農作業をしたらいいかなど大切なことを教えてもらいました。米作り以外にも、昔の人たちは暮らしの中で、生き物たちと対話しながら、大切なことを感じ取ってきたのです。そんな時代に、ぼくたちウナギはいつも人間のすぐ近くにいました。

だから、今の人間たちにも、昔の人たちのようにもっとぼくたち生き物と対話してほしいのです。そうすれば、桃太郎のように生き物たちから知恵や力をもらって、鬼(環境破壊)を退治して、忘れられていたお宝を持ち帰ることができるかもしれませんよ。地球環境の危機を乗り越えるには、新しい技術に頼るだけではなく、そのような知恵や力を取り戻すことが必要だと、ぼくたちは思います。

ぼくたちウナギは昔も今も謎多き生き物です。

2000年以上も昔、古代ギリシアにアリストテレスという哲学者がいました。アリストテレスは、のちの時代、遠く現代にまで大きな影響を与えた偉大な哲学者です。かれは、ぼくたちウナギがいったいどこで生まれどこから来るのかを知ろうとしました。調べれば調べるほど謎は深まり、彼は「ウナギは泥の中から自然に生まれてくる」と考えました。彼の後にも、いろいろな説を考えた人たちがいましたが、20世紀になるまでその謎は解けませんでした。ぼくたちは、昔も今も人間に問いかける謎多き生き物なのです。

アリストテレスは、こんな言葉も残しています。

たいていの人たちは、幸福であることを選択するのではなく、幸福であろうとする目標に向かって、金を稼いだり、危険を犯すような選択をするの

である。

多くの人間は、幸福とは何かという問いを忘れて、これをやったら幸福になれるという方法を選んで、その方法にばかり夢中になって生きているといった意味です。自分にとって幸福とは何かという問いに決まった答えはありません。でも、問いの意味を深く考えることをやめてしまったら、とたんに人間は幸福を見失ってしまいます。

答えの見えない問いに応えることで、イノベーションを起こそう。

「ウナギとは何か」という問いにも、決まった答えはありません。その答えは、ひとりひとりが自分で見つけるしかありません。この問いは、決まった答えに辿り着くことのない、どこまでも続く問い(アポリア)です。

それだけではありません。何かと問うあなたにも、問いがかえってきます。そのように問うあなたは、いったい何ものか(どのように生きているのか)という問いがかえって来ます。それは、問う人に、自分はどのような人間なのか、どのような生き方をしているのか考え直し、いまの自分を知る機会を与えてくれる問いなのです。

学校に通っているみなさんは、総合的学習の時間を知っていますよね。この時間も、同じように答えの見えない問いと向き合って考え、仲間と話し合うための時間なのです。誰かに答えの導き方を教えてもらうのではなく、ひとりひとりが自分の方法で考えます。

本当のイノベーションとは？

みなさんは、最近イノベーションという言葉をよく耳にしませんか。イノベーションという言葉は、社会を大きく変えるという意味で使われます。この言葉も、技術開発(方法)にかたよった意味で使われることが多いようです。けれども、新しい技術を見つけても、イノベーションが起きるわけではありません。イノベーションは、自分のあり方を自ら変えることができたときに、初めて起きるものだからです。

絶滅の危機にあるぼくたちウナギを復活させるために必要なのは、本当の意味でのイノベーション、つまり人間のみなさんが、ぼくたちの問いかけに応え、自分たちのあり方を変えるということなんです。

ぼくたちウナギと一緒に、失われたつながりを取り戻し、地球環境問題を解決に導いていこう。

ぼくたちウナギは、地球に広がる壮大な繋がりに支えられて生きる生き物です。ぼくたちは、赤道近くの海で産卵をして、卵は海流に乗りながら孵化し稚魚になって日本近海にまで移動して、それぞれの川の河口から上流に向かってさかのぼり、湖沼や里山の田んぼや小川や池などに自分のすみかを見つけて暮らします。

ぼくたちウナギのすみかは、赤道近くの海からあなたの近くにある小川や池までの自然のつながりの全てなのです。この大きなつながりは、地球環境を支えるつながりの一つです。

だから、大きなつながりを支えに生きるぼくたちウナギと共に暮らしていけるように、皆さんの暮らし方や社会のあり方を見直し変えていくことは、地球環境問題の解決に向けた大きな一歩にもなるのです。

なぜ、人間はウナギの暮らしを支えていたつながりを壊してしまったのか、考えてみよう。

ぼくたちウナギは、とうとう絶滅危惧種に指定されてしまいました。ぼくたちがここまで追い込まれた原因はいろいろあります。

そのひとつは、ぼくたちがシラスウナギ(稚魚)の時に、人間が養殖をするために、ぼくたちをたくさん獲ってしまうことがあります。(ウナギの完全養殖が実現したら、シラスウナギの乱獲も無くなるのではないかと、ちょっと期待しますが。)

もうひとつは、人間がウナギの生息を支えている壮大な繋がりを至る所で分断していることです。

人間が、ぼくたちのすみかに河口堰や水門、コンクリート護岸、ダムなどを造って、ウナギの暮らしに必要な自然のつながりを壊してしまった結果、ぼくたちは激減してしまいました。それ以外にも、生活排水や農薬による水の汚染も、ぼくたちのすみかを奪いました。

人間は、科学や技術の力で、自分たちの都合の良いように、川や湖などの自然を造り変えてきました。それらによって、災害を減らしたり、便利になったり、たくさん物が作れたりできるようになりました。

しかし、最初の方でぼくが紹介した哲学者の言葉を思い出してください。「技術は、人間と自然との関係を支配する」という言葉です。

人間を便利にして豊かにした今の技術は、人間と自然との関係をどのように支配しているのでしょうか。人間に自然をどのようなものとして、見えるようにしているのでしょうか。つまり、今の人間にとって、自然とは何かという問いです。ぼくたちには、人間は様々なものを自然のつながりから引き離し、自分たちの思い通りにできるようにしようとしてきたように見えます。そのようなことを、地球中の人間たちが続けてきた結果が、今日の地球環境問題を起こしているのではないですか。

ぼくたちウナギは、このような人間のあり方に、大きな問いを投げかけています。技術が、人間と自然との関係を支配するというなら、ぼくたちは、人間と自然の新しい関係をつくるために、人間に今の技術のあり方を見直してもらい、自然のつながりを生かした新しい技術のあり方を見出してもらいたいと思います。

それこそが、前にお話した「自分のあり方を変えることで、初めて起きる」本当のイノベーションだからです。

ウナギの問いを共有することで協働を生み、社会を変えていこう。

ぼくたちウナギが、再びみなさんと一緒に暮らせるようになるには、技術のあり方を変えるだけでなく、みなさんの社会の中にある様々な壁をなくしていくことも必要です。持続可能な社会の実現を目指す SDGs の中にも、様々な社会の壁を無くすことが盛り込まれていますね。

ぼくたちウナギを支えてきた自然のつながりが壊されてきた原因を探っていくと、必ずみなさんの社会には多くの壁があることに気づくはずで。社会の壁ができる大きな原因は、人々の立場の違いです。そのような立場の違いを乗り越えて一緒に考えるために、ぼくたちウナギが投げかけたような問いを共有することが大切だと思います。

ひとつの答えに固まらないで、どこまでも続いていく問いと、立場の違いを超えて人々が向き合いながら学習していくことができれば、違いを超えた取り組み、つまり協働による多様性が社会に生まれてくるからです。

ウナギの復活には、多様な人たちによる協働が必要です。

ウナギを呼び戻すために、みなさんが協働することで、地域に壁を超えた人々の繋がりが生まれ、これまで思い付くこともなかった問題解決のアイデアや使い道のなかったものの利用法などが次々と見つかり、地域に活気をもたらしてくれることでしょう。

だから、ぼくたちウナギと一緒にまちづくりをしていきませんか。間違いなく、楽しいですよ！

ぼくたちウナギや子どもたちと一緒に霞ヶ浦を再生しよう。

日本で二番目に大きな湖、霞ヶ浦の周りに住む子どもたちは、学校の総合学習の時間のテーマにウナギを選びました。まず、むかし身近にウナギがいた頃の湖や川の様子や人々の暮らし方などを、地元のお年寄りや漁師さんから聞くアンケート調査を行いました。そして、今の水辺の様子を調べて、昔とくらべてみました。

すると、昔は霞ヶ浦だけではなく周り(流域)のいたる所にウナギが暮らしていたことが分かりました。そして、今はそれらの場所ではウナギはほとんど見られなくなったことも分かりました。自分たちが住んでいる街の中にある小さな川や池などでも、ウナギがとれたと知って、子どもたちは驚き、ウナギを街に呼び戻したいと思い、ウナギを呼び戻すための街づくりを提案しました。

子どもたちが行ったアンケートには、漁師さんたちもたくさん協力してくれました。漁師さんたちの多くは、ウナギが激減した理由として霞ヶ浦と海をつなぐ川に造られた常陸川水門(逆水門)をあげました。実際に、霞ヶ浦の漁獲量の年ごとの変化を示したグラフを見てみると水門ができて閉められた後(1974年以降)に、ウナギをはじめとした漁獲量が激減していたことが分かりました。

水門が造られた理由は、海から塩水が霞ヶ浦に流れ込むのを防ぎ、霞ヶ浦から水を取っていた農業や工業や水道にたくさんの水を使えるようにするためでした。しかし、水門を造るときに、水門が自然のつながりを壊してしまうことによる影響をよく考えていませんでした。そのため、水門ができてしまうと、海からシラスウナギなどの魚たちが霞ヶ浦に入れなくなっただけではなく、湖の水が急激に汚れてしまったり、魚がたくさん死んだりするなどの問題が次々と起きたのです。

水門は今も閉じられたままですが、子どもたちと一緒にウナギのアンケートを行ったアサザ基金が、ウナギなどの生き物たちが海から湖にあがれるように水門を柔軟に開け閉めすることを提案しています。もちろん、湖の水を使っている人たちに影響が出ないようにです。

この提案は、これまでに多くの人たちの賛同を得て、霞ヶ浦の周りにあるいくつかの市議会で採択されたり、国会で質疑されたりしましたが、まだ実現していません。

* 提案の内容は、アサザ基金の HP <http://www.asaza.jp> 逆水門の柔軟運用の提案コーナーをご覧ください。

この提案の実現には、ウナギからの問いかけに応え、その問いを共有するより多くの人たちによる協働が必要です。

2023年8月1日

認定 NPO 法人アサザ基金

代表理事 飯島 博